

3次元形状データベースから類似形状の検索を行う新しい検索方法についての展示もあった。

本大会では、口頭発表会場と展示会場が離れていたため、できるだけ沢山の参加者に展示発表会場まで足を運んでいただけるよう、口頭発表会場の休憩時間中に全展示をスライドショーで紹介するという新しい試みを行った。ムービーやアニメーションなど工夫を凝らしたものもあり、スライドショーだけでも作品・技術展示のエッセンスを体験できるものとなったのではないかと思う。

◆企画担当より - カルチャツアー顛末 -

日浦慎作

企画担当 (大阪大学)

思えば昨年9月、横小路先生よりVR学会大会の実行委員就任の打診をいただいたのが始まりであった。実は恥ずかしながら大会には一度も参加したことがなく一抹の不安を感じたが、ふと脳裏に横小路先生持ち前の親しみやすい笑顔が浮かび、失敗しても許してくれるかなとお受けすることにした。しかし今年は同時期・同地域で他学会のイベントが多く行われ、ご多分に漏れず出動の要請を受けるほかなかった。そのため大会には部分的にしか参加できなかったことをお詫び申し上げたい。

さてこの企画であるが、「京都ならでは」というコンセプトを元に検討を進めた。しかし交通の制約からあまり多くの場所や遠方へ行くことは出来ないこと、企業は

研究所を公開しないところが多いことなどから行き先選びは難航した。だが今回は6年ぶりに大学での開催、それも京都大学である。わざわざ学外に出かけるよりは学内をご覧いただいたほうが、ということでテクニカルな部分はオープンラボとして実現し、ツアーは思い切って古都ならではの企画とした。しかし単



カルチャツアーの様子

なる観光ではなくVRらしいテイストも加えたいと考えていたところ、特別講演の真鍋先生が東寺に関係しておられ、立体曼荼羅等の解説もしていらっしやるとの話を聞いた。そこで特別講演と密接にリンクした企画として東寺への特別拝観が実現した。

東寺では通常拝観できない部分を含め全ての見所を特別拝観させていただいた。真鍋先生による解説は分かりやすく、別世界の具現化にかけた先人の努力と文化の深遠さを感じるものであった。オープンラボも研究室の最新動向を知ることが出来、丁寧に説明頂いたと好評であった。どちらも関係各位の全面的な協力によって初めて成立したものである。改めて感謝の意を表したい。

◆懇親会担当より - 今年は舞妓さんで行きましょ -

野間春生

懇親会担当 (ATR)

そもそも、バーチャルリアリティ学会大会懇親会には企画モノが付きものとなったのは何故か？私の記憶にある限りの歴史を紐解くと、第1回大会ではガムラン演奏、奈良では雅楽の演奏、筑波大会ではインタラクティブゲーム、札幌ではアイヌ音楽とダンス、再び東京ではジョイボリス、岐阜では前衛アート(以上報告者の参加経験)と、VRのまさにMixな部分が随所に現れる歴史となっています。

この華麗な歴史を継ぐために、今年はどういう企画モノを用意すべきか。忘れもしない第1回実行委員会において、大会長と幹事はあっさりとはサブタイトルのよ



論文賞授与式の様子

うに懇親会企画を決定されました。さて、“VRと舞妓さん”をどうくっつけるべきか、そこから深遠な悩みが始まりました。

参加された皆様は記憶に新しいように、芸妓さんのまさに華麗な祝舞で始まった懇親会は、客をもてなすプロである舞妓さん、芸子さんの一同のおかげもあり、非常に賑やかな宴となりました。また、恒例の論文賞授与式でも舞妓さんにプレゼンターを担当頂き、受賞者には二重にうれしい授与となりました。そして、最大の難関として如何に“VR”と“舞妓さん”を結びつけるかについては、今回のお茶屋さんとの架け橋となった高橋先生が自ら調査と報告をかっていただけることとなりました。結果的には、なかなか普段の生活では味わいがたいVRな世界を堪能頂けたのではないのでしょうか。

今となっては名物の感もあるVR学会の歴史であり、来年の第10回記念大会での企画モノを今まで以上に期待しています。

最後に、台風の影響で当日まで参加できなかった懇親会担当は単に当日に走り回っただけでした。今回の懇親会の多くの段取りを計ってくださった高橋先生と会計の黒田先生、ほか皆様に感謝いたします。



高橋先生による講演“VRと舞妓さん”

なら学生バイトに対して大会会場にて陣頭指揮をとるという役割が求められていたのであるが、大迷惑をかけてしまった。美濃先生発案の分散協調型指揮系統の徹底で大きな問題はなかったと聞いている。感謝する次第である。次に思いつくのが看板作成についてである。看板作りでは、京都らしさを表現するために招待講演タイトルに含まれる“曼荼羅”の図案をそこはかとなく配置できればと考えたが、どうやって手に入れたらいいか悩んだ。幸い、真鍋先生から予稿集背表紙用に使った図柄をいただくことができ、全看板について曼荼羅を左上に配置するデザインに統一することができた。気づかれた参加者がいたら嬉しい限りである。ちなみに図案提供は、招待講演された真鍋先生からではなく実行委員の真鍋先生からである。お二人の間に特に関係はないとのことらしいが、何か因果を感じてしまう。(小山田耕二)

会場担当をご一緒させて頂くことになった当初は、実は「ばるる京都」での開催を想定し、予算を覗んだ部屋割りのやり繰りや展示スペースの検討を行っていた。一方、昨年秋のこと、竣工前の京都大学百周年時計台記念館を下見に訪れた。大会長の美濃先生、総務で奔走された角所先生と共にヘルメットをかぶり、各ホール、会議室等を見学した結果、改めてここをメインの会場とする方向が定まった。ただ、全てが新しいという魅力の傍ら、ホールの電源容量が展示には不足しているという新しさ故の課題も残っていた。臨時増設は許されるか、または恒久的な増設計画がないのか、状況把握に困難を伴いご心配をお掛けしたが、最終的には恒久増設の許可が得られ、機材搬入日に何とか間に合うに至った。皆様からのお力添えや、夜間工事のご対応の賜物で、深謝する次第である。結果として、時計台記念館の設備がこれを機に増強されている。盛況裏に閉会した本大会の一つの置き土産のように感じられる。(牧淳人)

◆会場担当より

小山田耕二

会場担当(京都大学)

牧 淳人

会場担当(京都大学)

会場担当として、学内イベント参加のため大会そのものに参加できなかったことをここでお詫びしたい。本来



京都大学 百周年時計台記念館